

12 中村元博士の思想研究の継承への試み（中村思想と比較文明学）

【全4回】／開催方法：ZOOM

ほさかしゅんじ
保坂俊司

中央大学大学院教授
比較文明学会会長



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000(納入期限：9月5日)

【日程・時間】【全4回】 9月12日(木) (12:40~14:10・14:20~15:50)
9月13日(金) (12:40~14:10・14:20~15:50)

■受講に必要なもの

[テキスト] レジューメ配布

中村先生の偉大さは、云うまでもないことであるが、その偉大さが、仮に個人のレベルの偉大さに止まるならば、その学問的な評価は、時代と共に逡減してしまう可能性は、決して小さくない。勿論、学問的な意義は決して摩滅するわけではないが、如何に偉大な業績であっても、時代と共に生きる部分があり、その時代性を含めて偉大な業績と評価されるのであるから、中村先生の業績も、それぞれの時代背景を加味しつつ評価されることで、受け継がれ、それに依ってその意義もそれぞれ検討されつつ引き継がれてこそ、偉大な業績であり続けるわけである。逆に言えば、中村先生の偉大さを示す為には、その学問のあり方が、引き継がれることも必要な要素ということになる。

というのも、歴史上、生存時には華々しい評価を受けつつ、時代と共に忘れ去られた思想家は少なくない。一方で、時代と共に評価を上げる、あるいは高い評価を受け続ける思想家も少なくない。

一般に偉大なる思想家という場合は、多様な意味を含むが、ここでは、質量共にその研究活動、思索の深さ等々において、その時代を代表する思想家・研究者と一応の定義を行おう。そうすると、中村元先生の存在は、明治以来の偉大とされる思想家、哲学者（これらの言葉は、本来の意味は余り変わらないが、アカデミックに特殊化している部分が誤解を生じている。ここでは両者をほぼ同じとする）の中でも、昭和後期から平成を代表する哲学者としての評価は、不動である。勿論、時代を超えた偉大さもある。

が、しかし、偉大な哲学者であっても、その思想は、常に読み継がれ、解釈されつつ継承される必要がある、その為には、中村思想の業績の単なる祖述に止まってはならない訳である。つまり、中村思想と批判的に対峙し、その真髓に迫る事を目指さなくては、中村思想の継承とは云えないのではないかと私は考える。勿論、浅学非才な私であるが、中村先生の警咳に接し、思想研究者たり得た私は、中村思想の一端であっても伝えてゆく義務があるように感じている。

中村先生は「奴隷の学問を脱するために、私が一番槍になります」と好んで話された。この言葉は、単に日本の思想界の事に止まらず、現今の日本社会の停滞の遠因ともなっている近代日本思想への中村先生独特の批判が込められた表現であるが、それに止まらず、中村先生の真の学問のあり方、つまり真理への探求への決意が見事に表わされている言葉である。

今回は、中村思想の継承をテーマに、拙著「インド宗教興亡史」（ちくま新書）を題材としたい。

【参考書】

- ①インド宗教興亡史 著者：保坂俊司 出版社：筑摩書房 出版年：2022
- ②ヒンドゥー教と叙事詩（決定版中村元選集第30巻） 著者：中村元 出版社：春秋社 出版年：1996
- ③比較思想論（岩波全書 247） 著者：中村元 出版社：岩波書店 出版年：1984